

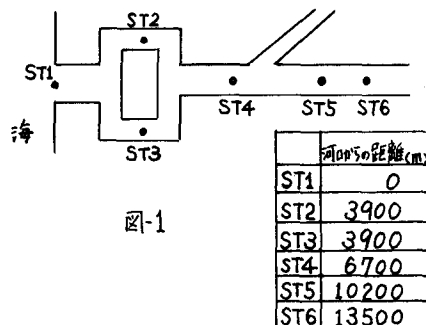
東京大学工学部
東京大学大学院

正員
学生員

玉井 信行
○田中 勝哉

1. はじめに

A川下流の感潮部に於て、昭和50年11月5日午前10時より25時間
にわたり、水位、流速、導電率等の連続測定が行なわれた。著者ら
はこの時の観測データに基づいて、感潮河川の流動特性、特に一次元
分散係数に及ぼす鉛直循環流の寄与等に関しての考察を行ったので
ここにその結果を報告する。A川は図1に示すような平面特性を呈
し、河幅、水深は河口部でそれぞれ最大値230m、4mであり、上
流に行くにつれ小さくなる。断面形はおおよそ長方形とみなせる。
測定はST1~6の各地点の河道中央部で行なわれた。



2. 分散理論と実測

二次元拡散方程式に於て、流速 U 、塩分濃度 S を次のように分解する。

$$U = U_0 + U_1(t) + U_2(z) + U_3(t, z) \quad \dots ①$$

$$S = S_0 + S_1(t) + S_2(z) + S_3(t, z) \quad \dots ②$$

$$\partial S / \partial t + \partial (SU) / \partial x = \partial (K_x \partial S / \partial x) / \partial x + \partial (K_z \partial S / \partial z) / \partial z \quad \dots ③$$

①②を③に代入し、水深、潮汐周期で平均をとり、塩分フラックスが $\partial S / \partial x$ に比例する
と考える。この比例定数がいわゆる分散係数である。

$$\langle S_1 U_1 \rangle = -D_1 \partial S_0 / \partial x, \quad \langle S_2 U_2 \rangle = -D_2 \partial S_0 / \partial x, \quad \langle S_3 U_3 \rangle = -D_3 \partial S_0 / \partial x \quad \dots ④$$

$$\partial \langle S_0 U_0 \rangle / \partial x = \partial (D \partial S_0 / \partial x) / \partial x \quad (D = D_1 + D_2 + D_3) \quad \dots ⑤$$

今、 U_0 、 D が x によらず一定と考えれば⑤式は積分できて

$$D = U_0 \times (x_1 - x_2) / (I_1 S(x_1) - I_2 S(x_2)) \quad \dots ⑥$$

⑥式で得られた D の値と、塩分フラックスより求めた D_1 、 D_2 、 D_3 の値を表1に示す。分散係数 D に対する寄与は D_1 、 D_2 が主要
であり、塩分の影響が大きい下流部ほど D_3 の寄与が大きくなる
ことがわかる。以下 D_3 についてさらに検討する。

3. 鉛直方向循環流について

1). 流速分布 潮汐周期平均の水深方向流速分布を求めぬ。

$$\text{運動方程式} \quad \begin{cases} 0 = -\partial p / \partial x + \rho N_z \partial^2 u / \partial z^2 & \dots ⑦ \\ p = \rho g (z - \zeta) & \dots ⑧ \end{cases}$$

N_z : 渦動粘性係数

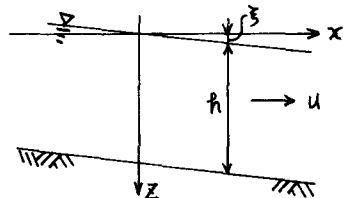
$$\text{境界条件} \quad \begin{cases} du/dz = 0, \text{ at } z=0, & u=0, \text{ at } z=h & \dots ⑩ \end{cases}$$

$$\int_0^h u dz = U_0 h \quad \dots ⑪$$

ρ 、 N_z の z 方向変化を考えないと⑦式は⑧式を用いて簡単に積分できて
⑩、⑪式の条件を満足するような u の z 方向分布が定まる。 u_2 は u から U_0 を
引いたものとなり、結局次のようになる。

$$u_2 = u - U_0 = U_0 (1 - 9n^2 + 8n^3) + \frac{1}{2} U_0 (1 - 3n^2) \quad \dots ⑫$$

$$\text{即ち } U_0 = g \lambda h^3 / 48 \rho N_z \quad \lambda = \partial^2 / \partial x^2 \quad n = z/h$$



即ち x : 流下方向 z : 鉛直下方向
 K_1, K_2 : 分散係数
添字0 $\rightarrow$ 水深方向平均の周期平均値
 t $\rightarrow$ 水深方向平均の周期平均の偏差
1 $\rightarrow$ 水深方向平均からの偏差の
周期平均
2 $\rightarrow$ 残差

表-1

	D (m ² /s)	λ (m ⁻² /s)	λ (m ⁻² /s)	D_1 (m ² /s)	D_2 (m ² /s)	D_3 (m ² /s)
ST1~ST3	3.1×10^4	1.2×10^4				
			ST3	1.6×10^4	0.3×10^4	2.4×10^4
ST3~ST4	2.9×10^4	2.0×10^4				
			ST4	2.1×10^4	1.5×10^4	1.2×10^4
ST4~ST5	2.7×10^4	2.2×10^4				
			ST5	1.6×10^4	1.7×10^4	0.7×10^4
ST5~ST6	2.0×10^4	0.3×10^4				

2). 濃度分布 潮の周期平均の水深方向塩分濃度分布を求める。

$$\partial S/\partial t + U \partial S/\partial x = \partial (K_x \partial S/\partial x)/\partial x + \partial (K_z \partial S/\partial z)/\partial z \quad \dots (13)$$

(13)式を水深方向に平均をとる。 $\partial S/\partial x$ は z に依存しないと仮定する。

$$\partial S/\partial t + (U_0 + U_b) \partial S/\partial x = \partial (K_x \partial S/\partial x)/\partial x \quad \dots (14)$$

(14)より(13)を引く 潮の周期平均をとる。 K_x は水深方向に一様と仮定すれば

$$U_1 \partial S/\partial x = \partial (K_z \partial S/\partial z) \quad \dots (15)$$

さらに K_z を z に對して一定と仮定すれば (15)式は次の境界条件の下で簡単に積分できる。

境界条件 $K_z \partial S/\partial z = 0$ at $z=0, h$

$$S = h^2/K_z \cdot \partial S/\partial x \left[U_1 \left(\frac{1}{2} \eta^2 - \frac{3}{4} \eta^4 + \frac{5}{8} \eta^6 \right) + \frac{1}{2} U_0 \left(\frac{1}{2} \eta^2 - \frac{1}{4} \eta^4 \right) + c \right] \quad \dots (16)$$

$$\langle S \rangle = h^2/K_z \cdot \partial S/\partial x \left[\frac{1}{12} U_1 + \frac{7}{120} U_0 + c \right] \quad \dots (17)$$

$$S_1 = S - \langle S \rangle = h^2/K_z \cdot \partial S/\partial x \left[U_1 \left(\frac{2}{3} \eta^2 - \frac{3}{4} \eta^4 + \frac{1}{2} \eta^6 - \frac{1}{12} \right) + U_0 \left(\frac{1}{4} \eta^2 - \frac{1}{8} \eta^4 - \frac{7}{120} \right) \right] \quad \dots (18)$$

3). 鉛直循環流による塩分フラックス

$$\begin{aligned} \langle \bar{S}_1 U_1 \rangle &= \frac{1}{h} \cdot \int_0^h S_1 U_1 dz \\ &= h^2/K_z \cdot \partial S/\partial x \cdot (A_1 U_1^2 + A_2 U_1 U_0 + A_3 U_0^2) \quad \dots (19) \end{aligned}$$

$$A_1 = \int_0^1 (8\eta^2 - 9\eta^4 + 1) \left(\frac{2}{3} \eta^2 - \frac{3}{4} \eta^4 + \frac{1}{2} \eta^6 - \frac{1}{12} \right) d\eta = -3.02 \times 10^2$$

$$A_2 = - \int_0^1 \left(\frac{2}{3} \eta^2 - \frac{1}{4} \eta^4 + \frac{1}{2} \eta^6 - \frac{3}{4} \eta^4 + \frac{1}{2} \eta^6 - \frac{1}{12} \right) + (8\eta^2 - 9\eta^4 + 1) \left(\frac{1}{4} \eta^2 - \frac{1}{8} \eta^4 + \frac{7}{120} \right) d\eta = -4.52 \times 10^2$$

$$A_3 = \int_0^1 \left(\frac{1}{2} \eta^2 - \frac{1}{4} \eta^4 + \frac{1}{8} \eta^6 - \frac{1}{4} \eta^4 + \frac{7}{120} \right) d\eta = 1.90 \times 10^2$$

分散係数の定義 (18)より鉛直循環における分散係数 D_1 は次のようになる。

$$D_1 = h^2/K_z \cdot [3.02 U_1^2 + 4.52 U_1 U_0 - 1.90 U_0^2] \times 10^2 \quad \dots (20)$$

4). 実測値との比較

U_1 , S_1 の分布について理論式と実測値との比較を示したのが図-3である。用いた

パラメータ等は表-2に示す。(2),

(19)式はかなりうまい議論ではあるが、実際の分布をおおむねよく表すことがわかる。(20)式に与る D_1 の値もあわせて表-2に示した。

5). 渦動拡散係数等について

実際の流速分布から渦動粘性係数 N_z , 渦動拡散係数 K_z を求めたものを表-2に示した。この場合の N_z , K_z は、潮の周期平均の流速の場合の値であることに注意されたい。この値を摩擦速度 U_* , 水深 h を用いて無次元化するためにあたって次のように、平均流速 U とマングローブを導入する。

$$U_* = \sqrt{gRI} = n g^{1/2} R^{1/2} U \quad \therefore U_* h = n g^{1/2} h^{3/2} U \quad m: \text{マングローブの } n \quad \dots (21)$$

U について $U_0, \sqrt{U_0}$ を用いた場合の $K_z/U_* h$ を表-2に示した。ST3 はデータに若干問題があると思われるので、一応これを除いて考えると、 $K_z/U_* h$ の値は 10^{-3} のオーダーであり、均質流体における定常、対数分布の場合の $K_z/U_* h = 0.068$ に比べて、1桁小さくなるようである。

4. おわりに

現地観測データをもとに、感潮河川における鉛直循環に関して理論と実現象との対比を行った。分散については、水平循環流の寄与が大であるという報告もあるが、今回はデータの制約上鉛直二次元的取り扱いしかできなかった。今後の課題であると思う。

最後に、用いた資料は建設省近畿地建によるものであることを記し、謝意を表する。

<参考文献> ① Charles B. Officer "Physical Oceanography of estuaries", ② Hugo B. Fischer の一連の論文

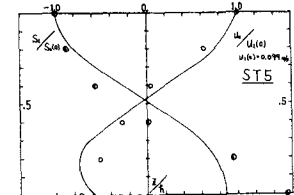
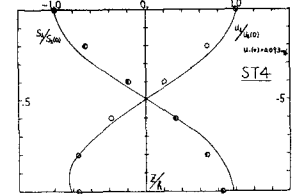
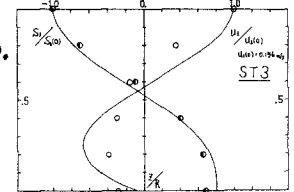
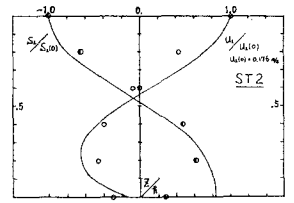


図-3

表-2

	U_0 (cm/s)	U_b (cm/s)	$\partial S/\partial x$ (‰/cm)	h (cm)	N_z (cm ² /s)	K_z (cm ² /s)	D_1 (cm ² /s)	$U_* h$ (cm)	$K_z/U_* h$ (cm)	$U_* h$ (cm)	$K_z/U_* h$ (cm)
ST2	0.031	0.161	2×10^{-4}	3.8	1×10^{-4}	5×10^{-5}	4×10^2	6×10^2	8×10^{-3}	1.2×10^2	4×10^2
ST3	0.003	0.154	-	3.8	1×10^{-4}	4×10^{-5}	3×10^2	0.6×10^2	6×10^{-3}	1.4×10^2	3×10^2
ST4	0.082	0.093	-	2.8	2×10^{-4}	2×10^{-5}	0.6×10^2	1.2×10^2	4×10^{-3}	1.4×10^2	2×10^2
ST5	0.056	0.071	-	2.7	1×10^{-4}	6×10^{-5}	0.3×10^2	8×10^2	8×10^{-3}	1.4×10^2	4×10^2

(注) $n=0.02$ ① $U=U_0$ ② $U=\sqrt{U_0^2}$